

霞関集

霞関集卷第二

夏歌

蛩

中原広壽石野

光ある露も蛩も草の葉に

いづれかいつれ玉とみだるる

幸隆

夕まぐれ葉のぼる露の光かと

蛩ぞまがふ夏の草むら

蛩似玉

源高門

ひろふとも露とは消えじ玉ぞその

玉とみだれててらす蛩は

幸隆

玉と見てさのみひろはばこと浦に
うつりもやせん夜半のほたるも

源昌名

夏かりの蘆まの夜の水すみて
数もさはべにほたるとぶ影

水上蛸

道筑

河風に落ちても水のあはれなど
きえぬほたるのおもひなるらん

海辺蛸

忠篤

なみのうへのほたるも玉とみだるは
夜半に衣のうら風や吹く

江蛩

源万彦

飛ぶ蛩風の行へにながれ江の

水の光も見えて涼しき

沢蛩

侍従貞臣

浅沢に光をおのが花かつみ

かつみだれてや蛩とぶらん

田家蛩

ひろみち

かすかなる田づらの庵のともしびも

蛩やおのが友とみるらん

晩夏蛩

宗固法師

秋ちかきおのが光も此頃は

さび江の蛩数ぞすくなき

題しらず

よみ人しらず

くる人も思ひかけざる夕暮の

軒端にかかるささがにの糸

又は、山里の軒端にかかる

ある人云、此一首に、かけざる、かかる同字なりとて、軒にあやなる人云、此一首に、かけざる、かかる同字なりとて、軒にあやなきと直されたる一首のさまをとれり、詞花集に、神垣にかかるとならば朝がほもゆふがくるまで句はざらめや、此外ことごとくしるすに及ばず、広通が五百四十首の中に、蛩照舟、夏の夜は蛩ぞてらすいさり火の影かと魚もよるのうら舟、夜の字二ありとて、後に初五字ひまもなくと直したるはいとつたなし、歌によりて同字もさてありなん、琴柱に膠するは風雅の義にあらずや侍らん、同字同詞用捨は意にあるべく、一首のうへによるべし、たとへば、制の詞とてもよみ得たるは難あるべしと為村卿教訓なり、其時代高名の詞ゆゑ誰もよむやうになりたれば、とどめられたるもあり、又、一ふしありてよみ得がたきゆゑ、とどめられたるもあり、今の世にもふと其時に人のおほくよむ詞あるものなり、あかね、えならず、世ににずよ、みな用捨ある詞なり、粗忽によむ事にてはなし、今は詞の補ひによまれ候とをしへ給へるふかく感心、ついでながらしるす